源氏引哥

Genji monogatari hikuta

[Kyoto, 1654?]

PL788
.4
.G43 G3984
1654
Copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551306

源氏物語引哥

桐つぼ

ふるさとにそれかあらぬかのきむらもあれくさもれ出ぬ秋やなき

朗詠
老と我いかるるうきをちくさに昔ぬ世こそまされ

後撰雑二
なくさまるわれる秋もあり抱をけ紙つくる病をいかるるあるさ

友則
古今恋三
こゝろにぞいていねやうてこゝをを河下ようひてこひしきをれを

万
袖ぬるゝをもるゝをもゝめゝれゝをもれゝをも海らふこゝめれゝをけゝを

傍於勝延
古哀傷
うつをこいうし紙うくもるくこゝのつゝまれ山ゝるゝをうゝうして

うゝ人ゝう
指遣忘れ
もえゝてくゝをつくゝるをもんけゝこゝそ人をゝこれてやまんこゝをえ

ありけすみにくくうさるくてそ人のゝこゝうるけふ

後拾中
人いゝさゝこゝそゝをもれるあゝてゝれいかけさ秋をゝうゝ

ふゝ人ゝう

古今
むらさめのやどれるつゆにぬるゝ袖ほすまもなきころかな　兼輔
後雑一
人のおやの心はやみあしけれどおもほゆるかな　紀貫之
勅勘蒙て
ふる人もまさき葛はふ宿なれどくる人なしに秋風ぞ吹
いそのかみふるさとまでもきぬ乃人をたのめやはせし
六帖女
いくかへりてありさるれしる砂の松のねもとをたのみこしつゝ　兼輔
後雑一
人のおやのこゝろやみあしけれどおもほゆるかな
朝頼
恋ごろれいるるすをちをちをんむしれせをそらしまれしれ　雅正
後文
芸鳥の父をもれをもいろいろ地うるる男もすくなそのこゝろ
天暦御集
いさそのせをそその後の後のせをとゝめてうをろ鳥ごるるもん
作物集
玉すゝれおくをもとゝてねし地て芸をもうしさおもひけるか　能宣
結文
ゆひ和うろうまくゆひのこむろ紀衣のいろようつれとそ

はくま

指雑抄
こうもりをゆみこんと云ふ人のもとにつかはしける
新古今二
みすもりつるかきねのすゝ衣志のふのこうもりかはほり
指南四
なつのくれ
なつふくそでにかはほりのとりあつめてそこのハをつくる
指抄第
秋風のふきにしよりぞかはほりのもとめられぬ
古雑下
今こそはこうもりふくろ人もおもはすハをむくくして門さゝぬ
古俳諧
そんこうそでにすれいうをくすれいおかしひきまおもさうさま
俗文
こうもりすゝれ人いつれるさうにそ地あるこいつくさいみるれ
古文
こうもりすゝれよこうもりの心もて何のハをとる段とあさむく
仲哥
こうもりのあひうらこと我うそふれハ十さいのものうれしそへよう
指雑抄
引よせハこうもりにて老弱のつるひきするそもはこうさく

古非
ありぬやとこころもとなくあひみれどいとまれなるくさまくらかな
後拾遺
あふよは七夕つめよちぢにくてこちぬよとさしあえずそみえ
後拾遺
こころにも秋はありけり立田姫もみぢをぬさやとるらん
拾雑
雲わけてあひみるかたもあらなくに月こそ我をやどるてゆくさえいかに
催馬楽
乾ぬ前にやとりはすくへしみもりこもひきもむしろまくさまくら
古秋下
秋ふかみもみちに宿をかりそめにおもひそ人しなしなし
古秋上
おもてこはもちそもぬへき秋萩の枝もとををけなふる露
古夏
ちりそくるなへしそそふさしるも妹ごらあらさるなの花
後拾遺
ひこほしのまれにあふ夜のこころをいうちとくさとなけくらん
世中はうくつらくのみしくるしくもふすちるしら露
拾雑
ひとくれのこころを中はとくてあらいつるかなさとり

夕やこいこころちくくし月まちてくれわせこそ秋まちえけれ
六帖集
いつれゆえけるそとをひとりハきゝいれもせすナ六
六帖二
風ふけとえこそいてゝとはゝしあけんとおもへとねてしかな
拾遺二
恋こゝろ酒のこゝろ冬のこゝろとけこゝろいやそねくゝ
こゝろこそひこゝろあこゝろくゝれて善光寺めそいとちかし
後拾遺
すこやまいせおれあまれすて夜ふかきれうと人やこうくん
古今六帖
物こゝろまこゝろ人もこゝろ恋ふれはこゝろもこゝろあへもしつゝ
こゝろくを知るをるや世中をいかゝしあるこれわれ分こゝろをん

夕くれ

古雑下
世中いつれこゝろしてわるくんゆえこと頼こゝろやこゝろむな
六帖
なるをんこゝろのこゝろもいこゝむこゝろくん宿よこゝろこゝろ

古拾八哥
打つてすてもうる人もあらしされこれそこにもろく咲うへ何れ栄えも
古雑上　業平
世中よさてもうれのるくまれの世もといのう人恋るよくの
古恋二　友則
夕されハ尋るとけよもあれるひらうやう人のつれなき
万
あさくらやいくくさそわせこゝあるけのするさらいるる
古恋　深養父
冬ちるく雲のさるりれちけれハ中垣うりてされそらりけり
うそろくをこちふ山のさるりくあれそくーさうあく
万
ふくそれおる中何いくさあをもふとしめさめやも
古秋上　俊正遍昭
雲いあれて人いりのーおるれや夜もまう紀も秋の暗くこもり
新古雑下　よしこ人をくます
白波のようすうおるさよ世後うくもあきれなるれいやさをさうめ寺
古恋六　典伯藤原高遠
あまれうもすむーれ我うこれそそちめ世をいうくう
六帖
恋ようようくようくとうくとれをのそるくようようと

後雑二
年ふれハ我ふるさとの川のふちもまてぬるけなれ
拾芥抄
ひたち
ふるさと堀
ふるさと人ハ
ふるさとハ
ふるさと人ハ
ふるさと人ハ
ふるさと人

ひまもなくふりつゞきたるに、
小町
もろ門の一村すゝきかりそめにみしかれの
けふの日記
さゝ門のあれにそまさるあさぢふのこ雨もらくかりもれて月
ふるさとのあれまくをしきにもあるかなとよみ侍りけるを
新勅撰雑下
ふるさとのあれまくをしきにもあるかなとよみ侍りけるを
ふるさとの
うくひすの人のきゝそなれぬるはひとゝせ今もさかりん
催馬楽
やまぶきのけ
やまぶきのけ二俣
ふたつさきたるやまぶきのけ
ふたつさきたるやまぶきのけ三俣
いさをそなりやこれもうたうたまひてやらいさをそなりやこれもうたうたまひてやらい
催馬楽
おつまつのおつまつのそのおまつにおしらめれぬさゝれとひとを

古訓下
分ゝてゝゆくやうにうつくしみそだてゝ
ゆくやうにとなり物いふころよりかな
物ごゝろつくころまでは物ごとにおもて
和訓栞
物ごゝろ
源語抄
物ごゝろつくころまでは
伝聞
やうにあるべきものなりと教ゆるなり
むかしのをしへはかくのごとくなりしを
源語二
むすびをとゝのへかたちをつくりしより
重忠按下世のわれと
忠孝
古義
をしへもあれ我やうの人のよろづをうるさくいふ物
陳古私云
ぞとおもひけるかぜ
陳新云
世中をうらやましくてそくいふやうにとなり
大補
古誹
ものごゝろ山ぢのくちもりめいうえのそまつけれ
神代よりかゝるをわれおやとしてうまれ

元良
人こゝろ心のそこよくしらやなをもちてこそ
指長　行基
はけさやうをもろこしといふともこゝろもつくてそ
波数一　素性法師
とどよこさくれうしまさるもしくも心あらめやすこくり
催う宗
ゆるさこのさいさこのさささこの二時おのへそそう白玉指しまやちさ二時
それもよくさんまりまりまりもく四時わりをさこちのこそけこさん名
ちさ名時ちさりまさんちうりちうりを六時心まさいくんゆり
まれさゆり当の七時けさいさうさ当こあいまり地をさゆり当の
当ちうさと
奥
さこそのとうさきれまうさ名ちれいうんしうさ〇と当りあいさり
いうんのことうさんいはとこうするいうこちりてう当家こちこちく
こう当のをちうりこいはとこうまうさんしうちりわりてうさ

次手

古今 友則
ふるさとの花すすきをくりてもおもひいでよ秋の夜の月

古今二 ふるさとゝ人もいふ寺
我宿の花をちるまでとめてもとゝ人もいふ寺
古今 在原元方
ちるまでもゆきてもとはむ山ざくらおもひのほかの心ばへぞある

伊勢
いにしへのしづのをだまきくりかへしむかしを今になすよしもがな

古今 紀友則
いとゞしく岩間の中をすみかにて世にふるさとをとこそとはれん

古今 伊勢
おほかたはおもひもたえぬ世なれどもとはるゝ時ぞ露けかりける

後撰別 伊勢
ゆくさきもしらぬたびにもあるかなとゞめおきつゝ誰をしのばん

後撰別 とゞ人もいふ寺
思ふどちまどゐしてゝる花の陰立ちうきがたき心地こそすれ

新古今 小町
あらたまの年のをはりになりぬれば今はとてこそ春をまちけん

古今 深養父
日のもとにさきとゞまれる梅の花ちりてとくらん物とやはきく

新古秋上　　赤人
このゆふへ　ゆくりもなく　ひこぼしの
古歌下　　行平
とくるこころを　人あくかたに
玄玉　　為家
袖ぬらす　ひこの河のみさへまさりて　なほ　ゆく
白波　　家隆
いくちさりくるしをうらすらん　波のみるめは
六帖　　人丸
つれなくて　こころそふかきうらさびを　ひろふかゆゑと
後歌一　　兼輔
人のおやの心やみるめとも　海とはめるれ
ど　せ　人はあやなき名をそたてける
古秋上　　人丸
あまのまうけのもりくる　ほれぬれは　心つくしの
後古歌　　行平
しるしなりけり　人のなをたつ
拾歌五　　行平
須磨の関吹こゆるすまれとも　人をとゞめぬ
玉歌二　　人丸
波ぢかなれや　ぬるゝ袖かな

古今一
それを人がとゞめてお泊舟のゆくへもしらずなりぬるこゝろもしらでなん
古今下
やひとやひとしれずとも
新古今下
思ひそめたる人いかゞあはれやとこゝろもとゞめ
後撰二
うしとこそ心ひとつにとゞめおけ
後撰二
灌馬糸
あすもあらばやうかへりけるつゐでにまことにはかなき
拾遺四
我ゆくさきのちぎりこそ心もとなけれ

あづま

恋こゝろ消なんとひし川のみづまさるとてなどはゆるされ
あしたの雨のやはあひやくまもしらぬ
後撰三
波よのこゝろもしらでつゐにあはれ
拾遺秋
秋ごとにうつりうつろふ

ちふさちいさきみよゆえみ給ふ人のそこころもうむ給ふを
久くるれ月毛の駒をおこやこころあらんさまよりふ
やすくひきまもるさまよりふそれーとちふひーこと給ふやまふみ
ちふさ
おちーく行去とするひの心こころを力をうけのことも人よりこれを
人のおやの心こころやあくひとるふ給ふらふまふひめるふ
ちふさ
ちふさ
ちふさ

寄雪下
今さらに降りつもるべき雪もなし竹のこのうへをはらはざりけり
詞書は万
君をのみ心のうちにおもふかなわが袖にだに雪はつもらじ
古今六帖下
世中はむなしきものを知るらんかたみにのこる雪の白玉
古今六帖下
よしさらばふりなかくしそ山河にうかべてだにも人に見せまし
後拾遺
すみの山のおのれすてゆく雪ならば人やこころのうちもとがめん
ふりつもる雪もあらじとおもひけむ袖とふるうれしさ
拾遺
きみがいへにふれる白山ありとだにおぼえの冬のゆきかな
古今六帖
みやまべのこのしたくさかれぬまにまたふりかかる雪
古今六帖
我庵はふもとの山にあらねどもつまどふ雪はつもりけるかな
いとどこそまさりまされとおもふべきふりつむ雪のこれや限りと
後拾遺
月うへにひとりながめてふりつもる雪のこれや松のまがきと

なのこえに折ふしまさるものなんうき世中ゴくうき世中ゴくうきすもうれ

世中いろくくるりくるりまわりてくるりくるりさふさらうて

万葉集
里ごとにいりよせうとうかくのこゑもうれしき天暦四年

新古新下
物うりくれよ心のよ何のあそびすきよりうりん

古新上
新古今
新さうもうりんこをんなうりこれ物もむすめもうりうりこ

今までよりもれぬ人の世にあふしてみうき浦くうれへめれい

古新下
久うりよりゆよりおひくろさとるれいえをおくそそのむへくろろ

新古新之
あそこちこのてあいしいろうよう月れうさうひいさうろうもも

なのこえい　おゝもゝ

なゝ
それこ浦そや紙よこれこうさこみうさいろうんろいろうまいろうん

こいろいろいうよあくれこそみうんこをこうれとあいしてして

校訂下
玉ぼよひこゝろにもあらで
古意一
ひとりてもねるよしもなし
流布本上
袖うちかはしこの君よりほかをば
新勅為
あふさかのせきのこなたに
あさくら

修行尺
ゆきゝのみちをなかうけまもるとて
流布初句
君が門いもてすぎうき
古意四
里人のことなきのみにくちもれゆくえもあしきうわさを
修行尺
すゑのまつ山波やこえなん
校訂
こゆれてふやうなる心のいでこうして
修行天
かゝるといふのこゝろは今は又人のうへともおぼえず

作者
そてくちはつくいあくまて天まきそ君娘のえのそくく

拾遺
しかその神あら山のえのくそれひくそ世よるとはるひおそき
人丸
とめとしをとめさいはもちらさまをたしと
辛度綿度成邑度綿尼備須毛可良多万半多成度
まきてとめさいはも
延麻波度辛度綿尼備須成
俗言
くまれ海のえ風ゆもへるる心もはへとくくあるる
源氏
あかまそくそれまよそやいへもれ二旬いへもやあらん
やくよのまよそ三旬あくれそくやふのまよそ

毛くく

作者
世中よいくまくそよへるそくのゆくもありけれ
古今誠
いあえの庵の山ちるいるや何いそくえよれもそ
注釈
いくそくくるれそくるやまくるそ

ここに

古今四
家隆
古今一
後拾一
兼輔
行平
明名哀
新千一
後京
春若集

新古今二
ひとくだのそこ心しおくるとも人を
後拾遺十
恋のくよすれつゝとこそうけれ
伊勢 古今
すまれおもはやくさゝりねをいつゝやうひこそ
後拾一
忍川こゝすゐうゝ水のあさけくうくる人はおもてきつゝや
伊勢
風俗土佐ヨリ
そこくる人をおろそ此のむまもまひるりそをいつ
すゐやまひるりそをや

万
こゝてせひおそまそれるおのおもこれひさうゝすくを
後拾一
ちつとともこゝろもゝゝくるゝ夜をそめてこそこゝろ
山吹を宮こゝうくてうたひやまひるひこそうされ
六帖六
夕されの雨人なくてみかさ山こゝろもすくれうくる
古今
袖にこゝくるゝゝゆきこゝくるゝ人ゝやそのひうるん

梅の花

古義之
梅の花いつれの人のをりしかばかをだにとめぬ袖にうつらむ

古義之
春雨のふりてをれどもをりてこし梅の花をばうしとやはみる

維る本
梅の花さきたる野辺をゆきてをれこの雪ふりてちりは過ぬや

古義下
いつまでかのこり心のあらむれんをしらなみもとめむ

精撰本
梅の花ちりすぎぬとやうぐひすのまだしきこゑをたにもきかぬ

一条摂政
梅の花ちりすぎぬとやうぐひすのまだしきこゑをたにもきかぬ

素性法師
ちりぬとてたれかはとはむ梅の花ありとやうぐひすのこゑをたにもきかぬ

中務
梅の花ちりすぎぬとやうぐひすのまだしきこゑをたにもきかぬ

古抄
梅の花ちりすぎぬとやうぐひすのまだしきこゑをたにもきかぬ

古抄
梅の花ちりすぎぬとやうぐひすのまだしきこゑをたにもきかぬ

後拾遺
梅の花ちりすぎぬとやうぐひすのまだしきこゑをたにもきかぬ

後拾遺
梅の花ちりすぎぬとやうぐひすのまだしきこゑをたにもきかぬ

古表
ゑふうへ一村すゝき出のねのそけさのくとをるうまけゝ
我やとれいさゝかわのきし水のきしてそやさゝみひろをそ
後撰
打そへてみそしれむ花の松いろとうあされ秋のもとの小か
古拾下
秋をこそへはてそまくれをくの巻うれうまくまいろのまくれい

ゆふれ二

伊勢
世中にさらぬわかれのなくもがなちよもとなけく人のこゝろ
後撰一
人のおやのこゝろやこゝろあくれはゝ子故にこそおもふべ
業平
けれさりけるさをゑうくいてゝいふもまをおとりすうか
人の世の老をもてゝせうしうふいあすとうけうくまう
後拾遺
秋くあいうくあくや吹あんやを中れさうあうさまうれも
人うう秋人そうくうゆめうさと人のうくとうくうゑ

伊勢物
枝変
雲井のくもるくらねとあくこがれそをもつれんとそや
催る系
思御をくるいとまようて　こてふさ
業平朝臣
うそへうつろへるうせいおくるみのうれまりとやうをつまん
催る系
ふのへんいとうちやうをもうれうそうそうそ
いつこうやふうろのあうとさはりうあうそくそうそ
百番下
雲の秋のやまいあやるく梅の香いろそそうれやそうく
活々
うつそうそうあいまいおうくうれそうそうそ
活々
ありそめて後まつ雪いむそむのりうろうれそうるうりう
百番之
おりつれい神そうそ人梅の香ありやうそうひすれるく
中系数時
活指
梅うを梅の香にうかうそやるさう殺ようせそうれ
百
世れうそうそうあ山伏人いうくうそ人そはうそうれ

後朝
人のもやのそらにやあるとも
後拾遺
ながめつゝ
おもふかなそと人にいひてやみぬる心のそらは
古今六
むらさきのひともとゆへにむさしのゝ
くさはみなからあはれとそみる
源重之
いつとなくこゝろのやみのくれまとはらそもなくてやはへぬる
後撰中
恋の心をよめる
あふことのたえてしなくはなかなかに
人をもみをもうらみさらまし
古今三
ありまやまいなのささはのかせふけは
後拾遺下
つゆもこもとやきみをわくらん
伊勢
人しれぬおもひのみこそわひしけれ
伊勢
わすらるゝみとやはおもふこゝろから
伊勢
こひわひてなく音をたにもたてつへき
白雲にうつりてとまる鳥の音をたに心のいろにつくれと

古今一
みるもあるまことものを人の心のくもあやなくもめくくる

古今下
ふのことと書てそこにめけるにもろこしやまさるれのけふの
古今下
ちぐさやみる秋のいろにもみくすも秋こそあくをうつろひにけり
拾秋
紅葉をあらしふきおろす山川のせにや秋をくりつくらん

伊勢
ひもろきいはのもりのくずのはもしもこゆるころをも
秋のよもちる紙一枚ありけるをとりてかきつけてやりける
雲の紙ぬのこころもしらでそうらめどもとかくいふもうるさし
返事
等もなくてかへしやりたれば紙おもしろかりけり
万
ちぢの色いろいろにうつろへど我心をばしる人ぞなき
唯手
ちぢにそめいろいろにうつろへど我心をばしる人ぞなき

百
なやこいぢもとくし月まちてとくれ我せこそのきみもこん
いぢもり恋の山路のこけれとへとうめろ人なきみこん

夜の日も私なすことあり物紙もとまろこひのいまるろこん
校異水
あろれともいつくさんいなほてまれいろくまるりめへきる
後校異四
恋しくれうこにまろこ拾ろこみ二夜とろこ紙こまこや
古訓
みやふ
冬ろこ雲のとろりのちくれ中うきとりてこれもちりけろ
古歌上
さろこ海こ年もゆろんをもあくろこうこひやともこんと
百首
うきのれゆろこひちとてこひこ今いろりれとてろりそり

うこそま

校異水
つゆさ
大ろれつ月ひとろれうきうこまてその世をもうこくろ
うくも世こ世よまれくろこれもみよ世れ松ろくろ

古今一
ふむ一のこゝろをよめるともひらのやすらひて吹くる
古今二
洞川さくらをよめるひと枝をもさすがにをしみけ
むすぼゝれもしんさうもいくもとんそくこゝろさしそ
人のせのおひてそしうせうこゝろあるともなけくこゝろ
古今
やひあるうめをよめるくんしうくいむむすひせ
後撰一
人のおやのこゝろやあるとをよめるに
新古今
古今
つくるもおくるゝ月をよめるそまくあるれうまにそひこゝろ
古今
うくをよめるやせ中をきしるこゝろ秋ふかをもん
古雑上
あるさうしうくのかねこゝろいつれてこゝろ

右雑下
今ここにかゝるいつくしき作のみえうさうしをけさせたまふこそ
ありがたけれ
右衛
志うしんく一一おすくさ出のこれさうのきの人をもるりをけうや
右検雑一
るさんくいとをつれをてこれをくこちくに月日をこちさうる
あきらみれ小藻うあるよくをそせよれうさうつとこひうるく
右歌之
白雲ようくのうちくくよりれみすくへこゆうあさよれ月
秋風よつく秋るれめうるのいをもうとをくくうん
心まてりまれわさうりいそてこみそいみよまさわさ
右歌一
くいく秋るるさるようりみてあうすいかをみのをよもん
雑下
いりとれとへそれみのひうさてをうりれそやくくまうう
やくまうう

古秋上
くさぐさの物ごとにふき伝いてあそばしん人さへそうき
すむしの
古雑下　平兼文
あらそへば今もまされほとゝぎすなけるかずをたれかしるべき
後拾中　源信明
いつとても月こそ秋はあかなきをなどてかくべのめづらしからん
後夜　雅正
袋をばいろいろにこそ作るらめ物うる方をすくせのこゝろ
後法下　源信明
あふことはたゞ名をこそかりそめに心ぞわれと人にかすべき
拾山院
心こそ外の月をもながめしかれやそれあるかなきかを
あづま路のかたそばの関のうちにこゆるあらしに秋風ぞふく　こゝろくら女
拾玉
なかめやる山ぎはいとゞくもりつゝ雨つるゝ秋のこゝろか　微妙女王
新古雑下
これ人のそむきはてめる世中よりそれ方ぞいとまなき

ク

千載下
ちの巻を分よふとてろ〳〵ゝとも
後拾遺
ろ〳〵ゝとも
後拾遺
ろ〳〵ゝとも
後拾遺

心なき人なき人と人なきをめ我恋つまをこんらんもれ

わてうつつ伏されるしさてよくよとをおもてうつ多

古詣　小町

人なおんつさのるさこいちのをさてむねそーうひよ心やけをり

古拾上　うこ人志て

白くくれるさめうちへ日いくれめとさふ山のこまをみくろ

いうてくよくんをれ山のとるとおつるとるーのさき

万　うたろめ

古前　命うる心よるふもれるしてもるよるれのるーうくまー

拾雑恋　うこ人志て

风そやこ岩のくをて生れとをすれいあやうやすき人のこころろ

万　うたろめ

愛るくく行をこうすくものれとも我うもまうふこひのとけさ

古前　うこ人志て

命ーくまこころるふもれるうそるよるれのるーうくまー

古恋三

秋るれい山とうむまてるく森まれおさくめやひとりめる秋い

秋のよは月ひろしとあふぐれどくもふの山をこえぬくるなり

後拾遺 伊勢

なるさ人のけさなきこゑやそ水のそこまでとをるこゑをきくとて

いろもなくいつるよりこんをの山のうへにぞおもひをきつる

くろ方はおぼつかなくそんじたるをやさへつくさ恋もするかな

新古今 よみ人しらず

ひろくさてろ八月ろくやまろのけうろすそれこもろうれろろ

古詞

ありあけの月と心にそこまでおひいでぬるかなしさまでを恋ふとは

いひそへたるなるべし古今の格の内にこれもいるべきなり

このうた

枕草子 行幸

法花経をよみたてまつるとてうちあくるほどにうぐひすのなきたるを

古今 うぐひすの

山ぶきのうつろふまでにへにけるかなきつるこゑのなつかしきかな

古今 よみ人しらず

ほととぎすいつもかはらぬこゑなれどきくたびごとにめづらしきかな

拾遺抄
秋ふくいろる風のつろちれて為うー心そらりあられるうー人
和泉式部
やくもをけさこそもめくさそうくよ心ひそうくうやのつ雨
後拾遺二
おろつさ社家い松よとさけつを多集のうへとちよ心ひくん
後撰雑二
ろろくまいちとせ代をくも心ちて松い雨ことにひさーうくう
拾遺
ろくさそうろくさろそへめくさそうろにてそを山のそ社
古今
うつをこふうく代そうつをるくさそれ山くみうさくそ
伊勢集
うりおひてるくる声を糸うてりるそうをそ玉よめるん
後撰
いる世ともいひそるれさうさ拾い為さそうともめ世ゆそう
伊勢
新古今
事社家りそれ雪やうれ中れをくれさ社こりあめーるうん
伊勢正通所
あうれの吹へとうーどーふへそやそ泊の雪と人のうるん
拾遺一
佗つをこさよふそうりはるーてさそふやりる為れそうりるうん
よき人しる

まかろし

後葉下
いくよとも春のひろはにつるくさのよろづ心そゆきかふ
後葉上
なかめくらしつるかなへし白雲のたちやとるらんかへるさの山
後葉上
うき世よはいとひすてきとおもへともあるにかひなきみにそありける
古表
すみそめのきみもおもはゝ雲もあれやこすゑのまつのとのかふ
後葉上
こちふかはにほひをこせよ梅の花あるしわするな春の夜の月
古表一
よしふるさとゝたにかくれおく山のみねのさくらを人もたをるな
後葉中
大空はおほふそらりの袖もかな春さく花をうつさゝむ
古表
名もしらぬ草木ことさら白へともうへなん人のけそこひしき
古新下
先もおさきさうらいは春もとそてるれいさきそとくちろ抱心ひもる

世中ハくらくくもりよくりもるくくしくくもりもるくし
古今
おくれ空へのくもくし心あしくハとくしくろりハすくこそめくよさ空
後拾遺
さもこそハうき人のおもひけさめくれおもひをつまるへくしやハ
うき人くしす
後拾遺
後くへ思ふくちもさまよはとくこさまみ世をもるしをる者こさくもるり
ひとりしてさくくるるくこさ時るいまかさみまとるるせこや
さうおれひこる
古今四
六そくくハ恋くしき人のくるくこくハ拙心ふくとりおるめくるくん
いまくへのくとくくへをほとくこさすいくよさりてうおるくこふまるく
宿房
六帖
るるくさそまさりよまさろ人のかよいくよ地ほろちまくるちるくん
古秋上
我のこやあくれとふそんさりくすまくタけのやまとるてくこ
秋ハおる風タまくれそくまるる義の声こされくこる
我為ハいるるくこさとれつこさをひハるをそそとをふいさりそり

後拾
もろともにおきるし秋の朝露のけぬるこひもするかな　左上釈ト

秋五月雨のころ
いつもかくれいおりしてとく秋ひろはねいおりさ
やれいはしやしきいへなこらめへしあるくもうへをまされり
ひるしとみひるまひそ水くきれ泊いれてをれくこおりくり
後冬　あつくこの釈ト
初雪ふとすると月日もとらめまるよしもふまそめとくく

ふるふる

古秋上　ふるふるおもはゆる雲もれをおつるとろくまされろめれめり
古秋上　ふるふるめくそまほくれ秋のくまくろめきみし菊うろ風さる　そせい法し
古玉上　梅の花ころろうろうろ人のくもろくのそ心くろ　あくこんとう寺
古秋上　秋くろ紙ふくくくみてく森のめいくしまてをれさやけき　N
古玉上　雪のふれやいあやもし梅の花いろくそくろやもろく　ろろは

水さ
やとくのはるやとるそてうやとるそれうやしも二時神のさ子
これやーろる

紅梅

古芸上
志ろそてそれこゝろそん梅の色いろをもろ人そーろ
根ての浪さ人のこゝろもいろいろいてうつるをもろうそーろ
浪芸上
これもおのいろよりわて梅のさくそこくよに須もろうろう
浪芸下
あくるもも自ご芸ら紙おもくに心ろれそん人ろうこそや
古今伝的

竹河

古芸上
こゝろも香こそ衣と世る須ゆれろ神ふれしーやろれ梅そも
優る不
梅うえよさうおう芸ら久てそれ　梅うえ三首
優る不
これそれに込へとこみうろれるれおそれるれおそれ
おそ三首

催馬楽
竹川のそこのうろ玉それよ　そこれよ
古今
梅がえにうぐひすなきてとふからに
後撰
雪島のいろをもねをもいかにせよ
古歌上
そこそこそこよ夜もふけてそこそこそこ
後拾中
大空におぼほしつきよ神もきけうさくるをうらめしそこそこそこ
後撰拾遺
為ふさそこそこそこ
古歌
そこそこそこ名にめでて
催馬楽
竹川のそこれ　そこれよ
古歌
玉ぼこやこはあやなし神ぞとそこそこそこ
催馬楽
いられいらへまそこそこ　おそこよ

後撰上
世中をうくひくのそくいかてやいとるんとすらん
詞書ニ
あつまの後のおとこのもとにまかりもあひのかとりもあらんとそ
いひ
後撰
後撰ノ江
うら石のかそこ拘ひくうさ十一のやうにいつそさうやう
大和物語
大和
うるさくひのすもりうたにもるくへき紙今かとうくひるす
雲おこそうらはなりあれ
後撰下
屏のくるこるれあさ青それをもひつをもあせ申れうる
拾表
ふふりの家れいのうもおしうすもちすれ人のう海とうられい
古撰下
ワいかに都のうをそそむ世紙うちやまくへいふり
うそくうをこるふ山のうおうかあれそくうそうあれ

古今
つねよりもゆくへしられてかなしきことをおもふこころを
第十
あけぬれどこころもゆかずうぐひすをおくるこころをよめる
古今
さくはなのちりかひくもかとのみもあやまたれけり
後撰下
こぬひとをまつほのうらのゆふなぎにやくやもしほのみもこがれつつ
拾遺
拾遺
花ぞのにうつろふかげをとどめおきてたれをまつちとなるらん
古歌下
原のくろうれのかきりこれをのこせひつきもあれ世の中ゆゑ
新古今
春ふかみ
古歌下
世をのがれいるさのおくもかくれずはいかにうきよにすみわびなまし
浄土和讃
初ぐみの松葉よこほりをとぢてさくらのつぼみもふくらみぬ
古歌曰
あかずしてちりぬるものは花なれどまたこん春のいろぞこもれる
催馬楽
我門の
林もものぐもりもりぬ岩やこもりこん立田山のあけぼの

古序
あさ心うけんとまつ心のおのおのあさくいへをおもふ
古秋下
ひと人のつゆをそ立つゆまれむとおもふくまみちりぬ
俊正遍昭
うえしくさをこそおもふ心のそおうとあれそいくしさにあれ
人丸
拾遺誤ナス
うえしくさよそまうえしこそうれしけれうえてもみるかひありて
堅香子草
俊長
ちれてるやさをる心のいわこうへてみもろこひ人おりれもやも
白井
心寒こそ
心さしこそおもふらめおもふこそおもふらめをりてけるれ

あけまれ

古今四
為
ふるさとにしどころなくちりしかはたれかはるをしるべとはせん
万
とものみやうちをれさるとうちをけうむはるしるかる
俊頼集
ちりなをてるくるるをふうてけるるをいふ雨つゆ
古歌
ふるさとの梅とはるしるれちれさるほそくおもゆるる

催馬楽
あけもろやそうらうのろうやそうらうてわれとま
ろひあひうりらうとうろうあひよりらうらうく
古意一
ろういと伝ふるところありてあるひは行伝ふ海のそこをそ
古歌之
うつろうそう山くれの行まれろうい弟こるとけあり
古歌下
ろひ人のひるて立ろ其なハれむひるくもみちりらうら
附一集
ぱれ庵こけれろもよ男やっー仏の業るもの可いろっーとう
おく山のこれの可面そろひ人の社のいろをいろそまっーけ
まろもろの暁おろ氏別こいろうくまらよまれこそのけろ
古意一
ろよろれこをもそそわおく山のみさろうを人そろんん
ろもすろろうろいち社るろうひしくおまけゆうれ
仮字文
いろせともいひるくれをうろ和い男をろうとそのせるうそ

世中をうしとのみてもそくさうなるをいうくさん山ありてそれ
をもろくこえるこゝろもまよいちもやみる井をつくしてふるさとに
古今三
ありともみひとしてもてゝ昔うりあひとうれ秋はてうれ
百
わくさうのうちせの山のうちてふあうんうるすとも
大和
秋うき人しとうきいうこゝろ万もうけゆくさうちてそれ
秋をもうくすうるれ
春来うぐいす
古秋下
なるこえ紙をそれをれうめうふいうしてそ秋のそしめ嫁うれ
古今四
ありけうくうるしふ舟うさうくうるしふ人しもをわうりなん
古雑
秋はてゝ雨のさうそうをうる人しあるうまり岩を一とに
深秋
冷別
りこえをうてゝあるうこのるしこいうるれまくまおつう嫁うり
あのまいとをゆうれめもあり今あうすてと秋あうしいうる

万
わすれなむと我をもわれてやあらんそんまくあるは
六帖
世の人のこころくさぐさそれかおもひをつくしてうきいろもまた
拾遺
世中をいとふ山ぢにあらねどもうきこそつもりおとなしの
満歌
和泉式部
ありわやと心そそらんあひそれいさいはれてきまてそ
古今四
袋草紙
後拾遺下
もち月の如来をうすいはもち月のすきし日をもとらまそねまし
いろもれいあふこと海そうらてふ人をうらみんとてわひねて
後拾遺上
七夕のあまのかわ海うらにひさへをうらふ人のつれなきうらみ
ちうれてとまるあしろよい白ゆふしもまくまの見てあきの
古今四
そて人いとれてそうさ月夜ましうしうろい夜ことうしして

新葉集
雲高き紙こそすてぐ〳〵なりにけれ
なほ信
拾遺
なぐさめあれなどかみさすて
古今六帖
なかりけり
古今六帖
月やあらぬ春や昔と眺めつゝ
ながめ
古今六帖
ものおもふ袂ぞ雨と降りまさる
うらみわびさてもの袂に
なほ
うらみわびさてもの袂に
拾遺
大ぬさとみそぎの
小町
波ごとに
心ゝうきをうらみてぞ一日も
清流
あらまほしきは
いのりつゝそれとそ
傍注
これ歌いむべきかみそぐと
そもなほ

古歌下
いくうつもあくまでつゆをもるそまくあまれるまやひとつくく
元良親王
なほそこれ思ふにやとる人もの絵ろまれそそこもすろ恋ろか
古歌之
わろ心ろくさろうのろさくろやをそろすて心よてろ有をそそ
拾遺恋
湘川ろまろされもやもろさろ人のまくくれろそそともろくさろん
古歌之
我心ろくさろうのろ　又云二
後恋二
ひとりのの夏ひくろまろにおろろあろて有を春といろそうれめろ
古恋之
ろろくろもやひそそそめ心くろりあろ人くれ私のようれて
平兵文
古歌下
ありそてめ今下ろまれ泊ともろりろさくしおもしすのもろか
古恋三
ろりくろまろよ又ろまろさろもて恋め人くく人ろろくろ世ろりくろすろの人い
後恋四
いろせともいひろるれ寄ろうさ絶いろ紙心ともをめ世ろりろり
古歌
そそそろくめ今ろろろよいのちあくく報やろ寄ろろ人やろろめと

後撰一
何ごとにつけてもうきわが身かな
古歌云
日くらしながめくらすもいかなれば
思ふこころのあるにやはあらぬ
世中をいとふ人やいつくにてあまの
古今六帖
なるらんと人のとふにもいかにこたへん
拾遺
うきふしをおもひ知るやと人はいへど
中務
古今四
なほ人はこそうき世なりけれ
六帖
人しれぬ我こそなきて濡れまくり
拾遺
袖のみぬるる名にこそありけれ

洛新一　人のおやの心やうあるごとしこれもさこそ思ひやるべし　兼輔
古歌上　　うたがへども
おりつれいかでかそこへ梅の花おもひもかけぬ雪のふれるに
新古歌下　　又歌枕製
うぐひすのこゑもきこえぬ山ざとは雪ふりつもりてとふ人もなし
續古
あらざらむこのよのほかのおもひでにいまひとたびのあふこともがな　和泉式部
夕されはのくるるかたをながめつつ　人丸
あるを
新古歌一　　深草
つくづくと物思ふ山もかすみこめてうき人さそふ春雨ぞふる
後拾遺　　あふまでやわれもなげかむ
あふまでやわれもなげかむ人のいのちをたえてこそ思ひわびぬれ
古歌上　　ありもせ
なかりけんものとつくづく思ふにぞ有とも人をたのまざりける
古歌上　　人生
むかしこれの一ふしゆめにみえてまくらにあれとそそる
洛新一　　四条后春宮女
さてけふ人の心のうらさへのあやうさもみえぬこころは

拾遺愚
大うち殿我方ひとりよりとてこよなくての世をもとうしこつるか
俗物
名をもとこそしりつくをしてさ神いうけるまるうこけるか
俗物
大めそれひくまあること吹めれいなる人とそこそこそれさうれ
俗得
大めこと名こそこそれるれてもつるこうせいるてふそれを
ひこ俗しこ恋いまさりぬ天の河へこうをさこ紙いまもやめそよ
つさともみうこそていうり立ま犯こうらそともひまりさゆりとうへい
左近一
とふうそれこ恵まさこそあなくふのかうさ心を人さこうちん
ふへしる
ふへしる
ふへしる

拾芥抄四
くらゐの式
古今一
つくしても
新勅五四
山ゐの式
古今一
ひめれい
古今一
白雲の
伊勢物
ゑつきこ
催馬一
こちのくち
古今四
すみの式
古今四
老いぬ
新勅五一
老よ
大和
ゆきひめ

人丸
ふみ入しる
ふみ入しる
小町
ふみ入しる
ふみ入しる

古今一
我恋はむなしきそらにみちぬらし
古今集 赤染衛門
たのめしことの葉いくかへりぬる
古今集 小町
人をおもふ心のそらにみだれにし
伊勢物
われから身のうきになれば

みつゝ
古物名 波の音
浪花 浪之音
古松上

69038
6AP78